

八幡門前自治会がある地区の歴史小話（令和4年9月） 回覧

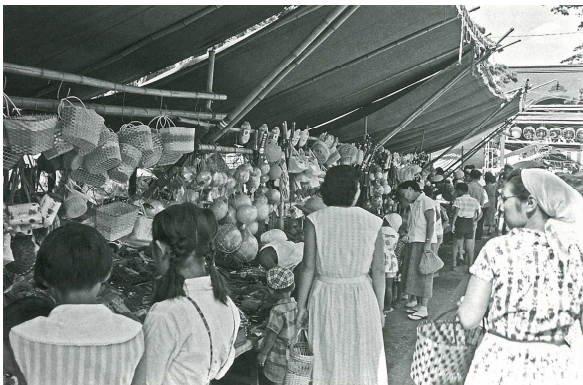
13. 葛飾八幡宮のボロ市（農具市）

当地区に住む者はボロ市(9/15～9/20)が最大の楽しみであった。年々、出店数が減少して寂しい限りである。”ボロ市には雨が降る”の印象が強いが、これは楽しみに水を差される残念さからであるが、当地に秋の長雨前線がかかる時期でもある。

寛延2年(1749)刊の『葛飾紀』には①8月15日(旧暦)には夥しい数の店が諸国から出店、②生姜まちと俗に呼ぶ(ショウガは当地の特産ではなく、当時は各地のボロ市でも売られており、風邪薬、胃薬として多くの需要)、③衣類が多く、諸商、小間物類も売られ、鮫桶は鳥居の辺にて山のごとく積まれ、いい香りが漂う、④見世物や小芝居が沢山出る、⑤貴賤の群衆が集まる、⑥路傍で夜は博打も盛んと説明している。

文化7年(1810)刊の『葛飾誌略』には國中第一の大市と記され、記述内容は『葛飾紀』と大差がない。

大正12年(1923)の『千葉県東葛飾郡誌』には、実に盛大で農具のみならず、日常生活に必須なものが売られていて、付近の十数里から老若男女が押し出し、買う人は毎日数万になるとの記載がある。



昭和5年(1930)に民俗学的な視点で「下総八幡農具市の研究」(本山桂川著「民俗研究22輯」)が発表され、この時は、露店が国道14号筋に一の鳥居から中山町境に至る約545mの両側と、一の鳥居から京成電車踏切に至る間の両脇(仲見世と称す)に654店。二の鳥居から社殿前に至る間には6列ほど(地内と称す)に269の露店が出店していたと記録している。

全923店の商品分類は衣類249(内古着60、ボロ29)、家具類238、飲食物189、雑貨125、農具35、玩具42、娯楽物22、その他23である。(『昭和36年市川市八幡神社 農具市』(山崎美喜男…写真、山崎秀雄…解説)は写真集だが、本山氏の研究成果もキチンと整理されており、ここから引用。掲載写真も山崎美喜男氏撮影)

プロの写真家の『濱谷浩写真集 市の音・街のざわめき1930年代・東京』もある。

なお平成7年(1995)に小泉みち子氏が、露店は156店との調査結果を残している。

★八幡のボロ市が下総國中第一の大市になった理由は次のように考えられる。

- ①出店地の佐倉道は東西を繋ぎ、南西から行徳街道、北西から木下街道が通じるクランク状(鍵状)の要路で四方から人が集まりやすい。
- ②道中奉行支配下の宿駅であり、参勤交代を助けるための助郷制度(近隣の村が人馬を出す制度)があり、近隣(妙典、稲荷木、大和田、河原、田尻、高谷、新田、鬼越、高石神、平田)の集落の人には馴染がある。宿泊施設はあり、出店者に便が良い。
- ③市川砂州の平地にあって神社境内の面積も広い。門前町としての既存店も少なく軋轢もない。寺と違って神社は排他的ではなく、門戸が開かれていて人が集まりやすい。
- ④江戸時代後期には梨栽培、桃栽培等で豊かになり、購買力のある地域であった。